

「生と死の教育の必要性」Ⅳ

—キリスト教の死生観，特にキリスト教の死後生の考え方との関連で—

岡 本 富 郎

Ⅰ．はじめに

1. これまでの研究。

これまでの下記の拙論を，今回の研究テーマと関係するので掲げておく。

「生と死の教育の必要性」Ⅰ—キリスト教の死生観との関係で—。ここではキリスト教の「いのち」と「永遠のいのち」に焦点を当てた。

「生と死の教育の必要性」Ⅱ—キリスト教の死生観，特に死についての考え方との関連で—。

「生と死の教育の必要性」Ⅲ—キリスト教の死生観，特に「復活」についての考え方との関連で—。

最後の拙論で，筆者は，本来時間的な順序としては「復活」は死後生の後に論じるべきだと述べ，なぜ先に「復活」を論じるかについて説明した。今回は，人間が死んだ後の「死後生」についてキリスト教ではどのように考えているのかを論じ，その後，死後生と教育との関係をまとめることにする。

2. 死後生を問うことについて

さて，小さい子どもは「死んだら，どうなるの?」と聞くことがある。親も教師もこの問いにどのように答えたらよいのだろうか。この問いは，小さい子どもだけのものではない。人間すべての問いと言っても過言ではない。言うまでもなく死後の世界に行って帰って来た人はいない。しかし，少なくとも，宗教的に主張する人はいなくもない。また，従来わが国では，迎え火，送り火で死者を迎え，送り出すことを習慣的に行ってきた。こうした習慣だけでなく，多様な習慣的な行事などで死者とのかかわりを持ち続けてきた。さまざまな死者の供養の伝統が地方にいまに残っているのである。

このようなことを考え直すだけでも，我々は死んだ人の死後のことを意識しているということが分かる。しかし，落ち着いてよく考えてみると，我々も死後のことが良くわかってはいないのである。もちろん，理解することは簡単ではない。だが，何らかの死後の考え方を各々持つことは必要ではないだろうか。このような問題を論じている哲学者，思想家はもちろん存在する。遠くはギリシア哲学者のソクラテスやプラトンは人間は死んだら霊が離れると考えていた。仏教では，極楽，地獄，キリスト教では，天国，地獄等の言葉で死後生のことを語ってきた。このように考えてみると，人間は死を恐れ，死後生のことをそれなりに思索してきたように思う。

ここでは、その内容自体の流れや諾否を問うことをしない。そうではなく、死後のことを問うことを通して、今の生き方を誠実に考えることに主眼をおきたいのである。

3. 死後生に関する最近のデータ

文部科学省の統計数理研究所の2008年の「日本人の国民性調査」の発表によると、わが国の20代の若者は「あなたは『あの世』というものを信じていますか？」という問いに対して「信じている」と答えた人が49%であった。終戦後のこれまでの調査では最も高いパーセンテージとなっている。1985年のこの調査のパーセンテージは13%であった。^(注1) この高くなった数字をどのように読み取るかは簡単ではない。最近のいわゆるスピリチュアル・ブームの様相が影響しているのかも知れない。また、現実の世界への嫌悪感がそうさせているのかも知れない。正確のところはわからない。

4. 研究目的と方法

繰り返しになるが、小論では、死後のことを考えることを通して現世でのあり方の重要性を子どもたちと考えたいのである。そのために、ひとつの宗教であるキリスト教の死後の考え方を明らかにしたい。研究方法は新約聖書に書かれている死後生について分析を試みる。

Ⅱ. 死後生（他界の生）について

1. 死後生について

死後の生にはさまざまな呼び方がある。一般的には、「あの世」「あちら」「来世」「西方浄土」「極楽」「死界」「幽冥界」「涅槃」「彼岸」「天国」「地獄」「ハデス」「ゲヘナ」「黄泉」「後の世」「他界」等である。

ここでは、死後人間はどうなり、どこへ行くのか、ということを取り上げる。まず、死後の世界をどう考えるか、ということについて、死後の世界を他界という用語を用いて他界観について論じる。その後キリスト教の他界観としての、神の国、天国、天の国、地獄などについて論究する。子どもたちに、死後のことをどう教えるかということを考えるにあたって、死後のことを考えることは教育者側に問われることである。

死後生について再度問題点を確認したい。人間はこれまでに死を恐れ、不安を抱き乍ら生きてきた。そして、後述するように死後の世界に思いを巡らし、死の不安をやわらげようと工夫してきた。一体死後の世界は有るのだろうか？無いのだろうか？そのことを科学で明確に理解することは可能なのだろうか？と言うより、科学で理解することの限界性を問うことをしなければなるまい。

死後の世界が無いとすると、人間は現世でどのように生きたらよいのか。また、死後の世界があるとすれば、人間は現世でどのように生きたらよいのか。この両者を考える必要があるのではないだろうか。

2. 他界観（死後観）の2大分類—近傍他界観（神道の他界観）と遠傍他界観（仏教、キリスト教の他界観）

哲学者である古東哲明は『他界からのまなざし—臨生の思想—』という著書の中で「他界」について詳しく論じているのでまずは「他界」という用語を使用して論を進めたい。^(注2)

古東は、近傍他界観、遠望他界観という二つの用語を用いて他界観を論じる。

まず古東は近傍他界観について次のように言っている。

「よく知られているように、日本人の他界観は、超越的なかなたへ飛翔しない。あの世はかぎりなくこの世に近い。むしろこの世そのものに内接する。「草葉の陰」というように、死者はくすぐそこ>にいる。他界（死界・幽明界・涅槃）と此界（生存圏・顕明界・娑婆）とは、別々のことではない。ただ、冥顕の区別（不可視と可視のちがい）があるだけである。」^(注3)

「他界をこの世の間近に想定するこの他界観を、以下、近傍他界観と名づけよう。近傍は数学用語。境界内とは一線を描しながら、しかしその境界線にギリギリまで直接する領域をいう。

とうぜん、イスラームやキリスト教圏で考えられる遠傍他界観とは決定的にちがう。

つまり、この世と完全に隔絶した、はるか彼方の背後世界（Hinterwelt）を遠望し、そこへ超越していくことで、生死の去就をめぐる不安や痛苦を解消しようとする発想や意志は、希薄である。」^(注4)

古東が言う遠傍他界観とは、イスラームやキリスト教の他界観であり、それらは近く傍にある他界とは違い、遠くにある他界であると指摘する。

次に古東の、近傍他界観についてみることにしたい。

「結論を先取りして言えば、それは一点、死をとり込んで生きる実存姿勢（死の相の下に生きる技芸 *ars vivendi sub specie mortis*）ということにある。近傍に死後や他界を想うとは、死をあるいは死界を迫るような間近さで感じるということ（ネクロマンシー＝死界との交感）であるが、それは死の影を溶かしてこの世を感じとることにほかならない。つまり、死者や死後世界を眼前の風景に透過させながら、この世を生きるということ。まるで死の近きことを感じとってなお生きている末期患者のように。

そんな死界感覚を研ぎ澄まし、死や死後をこの世の生存圏にひきいれ溶かしこむ文化装置として、近傍他界観やそれにまつわる儀礼や観念システムが起動すること。＜死のがわからこの世この生＞をまなざす視座（臨生する精神）のインストール機構として、他界観が機能していくこと。それが、近傍他界観の思想性である。」^(注5)

ここで考えてみたいことは、そもそも他界観はなぜ存在するのか。また、なぜ必要なのか。人間にとってどのような意味を持っているのか、ということである。このことについて

て古東は次のように言っている。

「他界観とひとくちに言っても、古代や中世に生きたひとびとと、近代に生きたひとびとでは、おのずからその内実はことなる。また地域や村落共同体によっても、その振幅はおおきく隔たっている。しかしどんな他界観でもいい。それがどんなに複雑で、繊細な絵柄をえがく他界観であってもいい。そこに託されているのは、同じただひとつの簡素なメッセージにすぎない。つまり、『死の死』。死んでも死なない、死後も生きているというわけだ。ばあいによっては死んでもまたこの世にもどる回路さえ、しこむ。Life after life(生の後の生＝後生)、Next World(つぎの世界＝来世他界)を構想することで、死の過酷な事実を抹消し、滅びや、生の事実の唯一回性を、否認する。つまり、死をなきものとする思想。死にあらがう思考回路。それが、他界観の基本的な思想構造である。」^(注6)

また、次のようにも言う。

「ポイントは、死という過酷な現実が喚起してしまう滅びや空虚への不安や恐怖が、他界観という『死の死の物語』(死をなきものとする思想)ににじり寄っているという一点にかかっている。

しかし、死をなきものとしてしまえば、そもそも死ぬこと(他界すること)が成立しない。＜死後の永世＞を想いえがく起因になった＜死への不安や恐怖＞の、そのさらなる前提である死や滅びの事実が、かき消されてしまう。他界観は、その＜願望＝死の死＞を実現することとひきかえに、その＜成立の前提＝死・滅び＞を否定してしまうわけだ。

つまり、その成り立ち自体が、その成り立ちの不可能性を、すくなくとも論理的には証示する。その意味で、理知的な概念装置として考えるなら、成立不可能なありえない概念装置を＜ありそうなこと＞として産出するところに、他界観伝承は成立する。」^(注7)

このように、古東は他界観は、人の死の不安や恐怖が生み出した、死の死の外線装置であると説く。死んだ後も、一種近くに居るというありそうなことを考えた内容が他界観であると言うのだ。したがって、古東は、認識論上の無理や過誤をものともせず、他界の想いはわきおこる、と言う。理知や節度のバリアを超えて他界観が来襲してしまう、と言う。近傍他界観も、そのような認識論的な機制にささえられて出現する、と言う。

それでは、この近傍他界観はどのようにして出現するのであろうか。

「本国の場合、それは＜見る＞といった対象思考的の産物ではなかったように思う。むしろ死の側が、この世に来襲する。生がそれに抗えないような霊威となつて、死界がこの世になだれこみ、生ける者の側を蹂躪する。そんなく生を圧倒する死」ともいうべきすがたとなつて、他界が包懷された。つまり、ふつうおもわれているように、死を生になじみのものとして回収する『飼ひ慣らされた死(死の生化)』(アリエス)の軌道をとらない。それはむしろ、生が死のがわににじりより、生を死化する他界観ですらある。いいかえれば、＜死にあらがわぬ生＞が紡ぎだす他界論。死を甘くみない、むしろ死が生を飼ひ慣らす、そういつていいかもしれない。そしてそのことが、近傍他界観を、たんなる＜死にあらがう生＞のロジックやヒュプリスにおわらせなかった根拠になるようにおもう。のち

にのべるよう、そのアクチュアリティ（現代性）も、この点に由来する。」^(注8)

古東は、他界観についてこのように自身の考えを開陳している。我々は、古東によるのみならず、自ら他界観を考えなければなるまい。しかし、他界観の内実はどう考えても古東の考え方と似通ってくるもののように思えて仕方がない。人は死を恐れ、不安に思い、死んだ後の自らのありようを現世でのあり方と結び付けて考えたい衝動にかられるからである。

ここでは他界観の内容を問題視し、その是非を問うことが主眼ではないので、この他界観について、もう一人、熊野純彦の考えを引用しよう。

「<ここ>で生き、<ここ>で死んでいった他者たちは、いまなお<ここ>に居合わせている。死者に語りかけようとする場合、あるいは死者となった他者に対して祈ろうとする場合に、ことばはたしかに『遠く』に向けられていることだろう。とはいえ、その『遠く』は、空間的に隔たった、しかも無限の距離を置いて隔たっているどこかというわけではない。死者はなお<ここ>に存在するからこそ、ひとは死者に向かってなお語りかけようとする。死者となった他者たちは、<ここ>にいながら、しかしふれることができない、つまり到達することが不可能なだけである。<ここ>にある、この世界のうちに、あるいはより正確にいうなら、この世界から直接に到達することのできない、とはいえ、その傍らに、死者の場所である『他界』がある。それは、過ぎ去った時間、過去がかつて存在していたというかたちで、いまなお存在するのとおなじことである。」^(注9)

熊野はまた、祈りとの関係で他界との関係を次のように説明する。

「かつて<ここ>でたしかに存在し、<わたし>とともに在り、<わたし>と交渉しあっていた他者たちが、死者となることによって、いかなる意味でも存在することを止めると考える理由はなにもない。他者が<ここ>から消失したとみなす理由もなにもないはずである。<わたし>はたしかに<ここ>でなお他者たちに呼びかけ、語りかけ、なにごとかを訴えるであろうからである。死者たちへの語りかけ、祈りがそこから発するその場所、<ここ>は、<わたし>がそこで生きているこの世界でありながら、他者たちもまたそこになおも在る、他の世界と隣りあった世界、『他界』を傍らに、到達することはできない傍らに有する世界なのである。おそらくは届くことのない祈りがそこへと向けられた他の世界、死者たちの世界は、<わたし>たちが他者たちに語りかけ、かかわりつづけているかぎり、<ここ>の、ほんの近傍に存在する。隣りあわせて接する世界に、生きているかぎりでは到達することができない、というだけのことである。」^(注10)

このように、他界について、熊野は祈りとの関係で説明する。そして、「祈りはおよそ、現前しないいかなるものかに向けられている。現前しない限りでは不在の或るものに対して向けられることばが、祈りなのである。現前しないことは、しかし、徹底して非在であること、無であることを意味しない。死者たちは、この世界から身を退き、現前の次元か

らは退引していることで、かえって痕跡として現前しつづける。」とも言う。^(注11)

死者は、祈りの対象として、存在し、祈りとの関係で痕跡として現前しているというのである。

これ以上他界観について言及することをさし控えよう。そこでこれから本論に繋げる意味で、確認しておきたいことがある。それは、先述したように、宗教だけでなく、哲学的、思想的に他界は論じられており、追及されているということである。人間にとって死後のこと、他界のことは気になるし、何らかの考えを各自持ちたいと願う重要課題であるからである。

佐藤弘夫はその著書『死者のゆくえ』で死者と他界との関係を膨大な資料をもとにして深く論じている。^(注12) その一端を簡略に紹介する。

我が国の死者に対する考え方においては、日本人は死者の遺骨をかなり重視するが、11世紀ぐらいまでは、天皇家や上級階級、僧侶など一部の特権階級を除いて、墓が営まれることはなかった、と佐藤は言う。そして特権階級も定期的には墓参をしなかったし、時が流れれば、墓は草木に覆われ、だれのものか分からなくなってしまった、ということが確認されているということである。12世紀ごろも墓がつくれられても、いったん埋葬がなされると、もはやその行方に関心がはらわれることはなかった、と説いている。

そして、15世紀から16世紀にかけて個人の墓、家の墓地が広く一般化していく。死者は檀那寺に境内墓地に埋葬され、その存在を永遠に記録すべく法名を刻んだ石塔が建立された。それ以降子孫による定期的な墓参の習慣も確立した。骨を納める墓には先祖が眠り、そこを訪れればいつでも故人に会うことができるという現代人に通じる感覚が、しだいに社会に定着していくのである。

このことの背景には霊の存在を重視する考えが根底にあるように思われる。墓を訪れればいつでも故人に会うことができるという感覚に基づく習慣化である。

このように死者に対する関わり方は時代によって、変化を遂げてきたのである。我が国の死生観、他界観が変化をしてきたことが佐藤の研究からも理解ができる。

Ⅲ．キリスト教の他界観（死後生観）

1. 先行研究について

先の古東によるとキリスト教の他界観は「遠傍他界観」ということになる。死者は近くにはいない、という他界観である。しかし、キリスト教の他界観をそう簡単に言いきってよいのかを別の機会に問い直す必要があると思う。また、そのこと関連してキリスト教においては、生者は死者との関係は全くないのか、ということをも問い直す必要があろう。調べた範囲では、我が国においてはこのことを含めてキリスト教の他界観についての先行研究があまりなされていないようには思えない。^(注13) そのような中で外国の3冊から他界としての天国の考えをごく簡単に紹介しよう。

コリーン・マクダネルとバーンハード・ラング著、大熊昭信訳の『天国の歴史』（大修館書店 1993年）は社会学的な天国の考え方の歴史を記した本である。彼らは社会学的に天国の思想を概観し、最後の頁で次のように締めくくっている。

「キリスト教の歴史において全く新しい、前代未聞の事態が発生しているといっている。伝統的な信仰との断絶の方がその継承よりも大きくなっているからである。ではわたしたちは今やポスト・キリスト教の神学というべきもの、古典古代の来世の肯定といったものとかかわりが完膚なきまでに失せているような神学、の勃興を目撃しているというべきなのだろうか。それとも過去1世紀の社会的発展や科学的発見により、大方の敬虔なるキリスト教徒にとってすら天国は、もはや信じるに足るイメージではなくなってしまったというべきなのだろうか。否、そのいずれでもあるまい。キリスト教徒は一多分大抵のキリスト教徒は一ある型の来世を信じ続けるであろうと言うのが本当の所だろう。それにわたしたちには天国の歴史を、古代文明なり死んだ人の伝記を扱うようには、回顧したり、評価したりすることはできない相談なのだ。永遠なる生活について新しい考えが将来出現するとしても、それはそれ以前の見解を新しく評価しなおす試みとなろうからである。」^(注14)

今引用した内容が、この本の集約的な考え方であるといつてよい。

次にJ. B ラッセル著、野村美紀子訳の『天国の歴史 歌う沈黙』（教文館 1998年）から、天国について紹介しよう。

「天国とは、万物が愛において互いに、そして神と、結ばれてある状態である。」^(注15)
ここにラッセルの天国思想が集約的に理解できる。こういうラッセルも天国について次のように探求方法を結論づけている。

「天国の意味を知的に探求するには、概念の歴史を通じてのアプローチが一番よい。概念史はすべての学問分野の知見を包含し結合するからである。人間が天国について考えてきたこと、というのが天国の概念の最良の定義である。」^(注16)

次にアリスター・Eマクグラス 本田峰子訳『キリスト教の天国 聖書・文学・芸術で読む歴史』（キリスト新聞社 2006年）を紹介しよう。

マクグラスは、天国について次のように言う。

「天国とは、人間の究極的目的、その内奥にある願望の実現であり、この上ない至福の状態なのです。人類にとって、この完成は創造のときから神が定めておられた人類一致の最終的な実現で、旅する教会はこの一致の『秘跡のような』ものでした。キリストに結ばれた人々は、贖われた者たちの共同体、神の『聖なる都』（ヨハネの黙示録21.2）、『子羊の妻である花嫁』（ヨハネの黙示録21.9）を形づくります。この共同体はもはや、人間の地上における共同体を破壊し傷つける罪、汚れ、自己愛などによって損なわれることはありません。神が選ばれた人々にご自分を無限に示される至福直感、幸福と平和と交わりの、尽きることのない泉です。」^(注17)

これらの著書からも学びつつ、キリスト教の他界観を直接聖書から学びたいと思う。ここでは、特に4福音書を中心にして、新約聖書から学びたい。もちろん新約聖書にはパウロ書簡等、4福音書以外にも他界観について書いてあるものが存在するが、今回は、イエス・キリスト自身の言葉に焦点を当てて分析したい。そして必要に応じて4福音書以外の聖書からも引用をする。

2. 4 福音書にみられるイエスの他界観（死後生観）

2-1. イエスが用いる他界（死後の世界）に関する用語

キリストの他界観を正確に言うことは簡単ではない。何故ならば、イエスは例えて他界に関する内容を説いているので、その例えを正確に理解すること自体が簡単ではないからである。したがって今回の研究においては、神学者、研究者の聖書解釈を取り入れながら、教育学研究者としての私見をまとめるという方法になる。

さて、先ず前もって示しておきたいことは、キリストが、他界観について多様な言葉で説いているということである。キリストは、他界に関する言葉として、「天国」、「天の国」、「天の御国」、「父の御国」、「神の国」、「御国」、「住まい」、「場所」、「パラダイス」、「ゲヘナ」、「ハデス」、等の言葉で他界観を表している。「天国」と、「天の国」、「天の御国」は同一のギリシア語が元になっている。すなわち「*ἡ βασιλεία τῶν οὐρανῶν*」へ「バシレイア トーン ウーラノーン」である。それを訳者がそれぞれ、上記の三つに訳しているのである。この表現はマタイによる福音書だけに用いられている表現である。神の国は「*ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦ*」へ「バシレイア トゥー セウー」である。「場所」はヨハネによる福音書だけが用いている言葉である。ヨハネによる福音書の14章2節に「わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、私は場所を備えに行くのです。」とあります。3節には「私が行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」とあります。「住まい」は「*μοναί* モナイ」である。「場所」は「*τόπος* トポス」である。ここで言う「場所」とは父なる神がいる場所という意味である。
(注18)

そこで改めて、「天国」と「神の国」について言えば、それは神の支配するところ、という意味である。したがって、この地上においても神が支配するところは神の国である。最大限、神が支配するところは、宇宙、地球も入るが、聖書では、神の支配が及ぶところをもっぱら神の国と考えているようだ。

天国は、その神の支配が及ぶところであり、死んだ人が神と共にいるところ、という意味に解釈できる。その詳細は後述する。

2-2. イエスの説く他界観（天の御国）

イエス自身は、「天の御国」と「神の国」とを強く意識して、区別して用いてはいない。マタイによる福音書に「天の御国」という用語が多いのは、マタイによる福音書はユダヤ人を対象にして書かれているからである。ユダヤ人は神という用語は畏れ多くてあまり用いないからである。

そこで、イエスが「天の御国」「神の国」という表現を用いた箇所を引用しよう。

1. 「こころの貧しいものは幸いです。天の御国はその人のものだからです。」

(注19 マタイ5-3)

2. 「だから、戒めのうち最も小さいものの一つでも、これを破ったり、また破るように人に教えたりする者は、天の御国で、もっとも小さい者と呼ばれます。」(マタイ 5 - 19)

3. 「イエスは答えて言われた。あなたがたには、天の御国の奥義を知ることが許されているが、彼らには許されていません。」(マタイ 13 - 11)

4. 「わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者がはいるのです。」(マタイ 7 - 21)

5. 「だから、神の国と神の義とをまず第一に求めなさい。」(マタイ 6 - 33)

6. 「しかし、わたしが神の御霊によって悪霊どもを追いつけているのなら、もう神の国はあなたがたのところに來ているのです。」(マタイ 12 - 28)

これらの箇所で行われている、「天の国」、「神の国」について、キリストはその内容が何であるかを明確に語っていない。しかし、再度言うと、聖書全体から理解出来ることは、「天の御国」、「神の国」の内容は、神自身が支配するところを意味する。そこでイエスが「神の国」についてその内容を説いている聖書の箇所を引用しよう。

「さて、神の国はいつ来るのか、とパリサイ人たちに尋ねられたとき、イエスは答えて言われた。『神の国は、人の目で認められるようにして来るものではありません。』『そら、そこにある。』とか、『あそこにある』とか言えるようなものではありません。いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです。」(ルカ 17 - 20, 21)

この箇所の意味を考えてみよう。当時のパリサイ人たちは、黙示文学思想というものの考え方をしていた、ということについて先ず考えてみたい。黙示文学思想とは、宇宙と歴史の凡てが神の予知と聖定によって決まっているという宿命論である。彼らは、実際に分かるような形で神の国がいつ来るのかを期待していた。彼らは、歴史の中で、自分が何を今なすべきなのかを考えなかった。そこでイエスは、神の国は人の目で認められるようにして来るのではない、と言ったのである。そして、「神の国は、あなたがたのただ中にある」と言い放った。「神の国」には2面性がある、未来の面と現在もう来ているという面とがある。

イエスはここでは、現在もう来ているという面を強調しているのである。それは何故か。パリサイ人たちは、細かい律法という決まりを遵守して生活をしてきて、上辺の形にとらわれていた、ということが一つ押さえられる。イエスはそういう彼らに対して、既に来ている神の国に主体的に行動して入ることを要求したのである。イエスが黙示文学思想に対して否、という考えを取ったのは、黙示文学思想に立つ人たちは、主体的自分が何かをする、ということをしなからである。イエスは、今、為すべきことを迫ったのである。すでに神の国はあなたがたのところに來て、あるのだから、行動をして入ることが重要だと迫ったのである。他のルカによる福音書 11 章 20 節では「わたしが神の指によって悪霊どもを追いつけているのなら、神の国はあなたがたに來ているのです。」と言っている。はっきりと、「神の国」が來ていることを宣言しているのである。イエス自身が人類を救

うために、福音を、つまりよき喜びの知らせをすでに運んで来た、と宣言したのである。
この「天の国」、「神の国」についてイエスは多くの例えで次のように説いている。

「天の御国は、こういう人にたとえることができます。ある人が自分の畑に良い種を蒔いた。」という種蒔きの例えや、「イエスは、また別の例えを彼らに示して言われた。天の御国は、からし種のようなものです。」というからし種の例えである。

また、「天の御国は、畑に隠された宝のようなものです。」「天の御国は、良い真珠を捜している商人のようなものです。」「また、天の御国は、海におろしてあらゆる種類の魚を集める地引網のようなものです。」「天の御国は、自分のぶどう園で働く労務者を雇いに朝早く出かけた主人のようなものです。」

「天の御国は、たとえて言えば、それぞれがともしびを持って、花婿を出迎える十人の娘のようです。」「天の御国は、僕たちを呼んで、自分の財産を預け、旅に出ていく人のようです。」

イエスはこれらの例えを詳細に説明はしない。一つの例えを取り上げて説明しよう。上の「畑に隠された宝のようなものです。」の例えでは、続いて次のように記されている。「人はその宝を見つけると、それを隠しておいて、大喜びで帰り、持ち物を全部売り払ってその畑を買います。」とある。天の御国は持ち物を全部売り払って買う価値がある素晴らしい国である、というのだ。

例えについて全体的に言えることは、これらの例えでキリストは「天の御国」が素晴らしいところ、幸いをもたらすところであると描いている、ということである。

2-3. イエスの説く他界観（地獄）

それでは次に、他界観との関連で、神の招きに応じない者が行く、「ゲヘナ」、「ハデス」、すなわち「地獄」に関する表現の幾つかをみよう。

以下に、「地獄」に関わる言葉を引用しよう。

1. 「兄弟に向かって『能なし。』と言うような者は、最高議会に引き渡されます。また、『ばか者。』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。」（マタイ 5-22）

2. 「しかし、私はあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。もし、右の目が、あなたをつまづかせるなら、えぐり出して、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体をゲヘナに投げ込まれるよりは、よいからです。（マタイ 5-28～29）

3. 「からだを殺しても、魂を殺せない人たちを恐れてはなりません。そんなものより、たましいもからだも、ともにゲヘナで滅ぼすことのできる方を恐れなさい。」（καὶ μὴ φοβηθῆτε ἀπὸ τῶν ἀποκτεννόντων τὸ σῶμα, τὴν δὲ ψυχὴν μὴ δυνάμενων ἀποκτεῖν αἰ· φοβήθητε δὲ μὴ λλοῦν τὸν δυνάμενον καὶ ψυχὴν

ν καὶ σὺ μὰ ἃ πολλέσαι ἐν γέεννῃ .) ^(註20) (マタイ 10-28)

4. 「忌まわしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。改宗者をひとりつくるのに、海と陸とを飛び回り、改宗者ができると、その人を自分よりも倍悪いゲヘナの子にするからです。」(マタイ 23-15)

6. 「おまえたち蛇ども、まむしのすえども。おまえたちは、ゲヘナの刑罰をどうしてのがれることができよう。」(マタイ 23-33)

7. 「カペナウム。どうしておまえが天に上げられることがありえよう。ハデスに落とされるのだ。おまえの中でなされた力あるわざが、もしソドムでなされたのだったら、ソドムはきょうまで残っていたことだろう。」(マタイ 11-23)

8. 「ではわたしもあなたに言います。あなたはベテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。」(マタイ 16-18)

以上がマタイによる福音書に表されている、「ゲヘナ」と「ハデス」についてのイエスの言葉である。

そこで、このゲヘナという用語について考えたい。その際に、特にここに引用した文章の3. の中の「ゲヘナ」について、田川健三を参考にして解説したい。^(註21)

考えたい。

「ゲヘナ」は、もとは、ヘブライ語の *gē hinnōm* (ヒンノムの谷地)、さらにもとは *gē ben Hinannōm* (ヒンノムの子の谷地) である。ヒンノムという語が本来何を意味したかは、わからない。人の名前かもしれない。旧約聖書の諸文書では、エルサレムの南方にある深い谷がこう呼ばれた(旧約聖書 ヨシュア記 15章8節他)。ところが、後の時代になると、神による最後の審判がこの谷でなされる(ないしこの谷の底から地獄の深淵に落とされる)と、信じられるようになった。これが縮まって一単語化し(*gēhinnōm*)、それがアラム語流の発音になると母音が変わって *gēhinnāmm* となり、それがユダヤ教・キリスト教ギリシア語では(*ge'enna*)となったのである。新約聖書では共感福音書(特にマタイは多い)のほかには、ヤコブ書3章の6節にしか出てない。

さて、この箇所の意味について探ることにしよう。ここでは「ゲヘナで滅ぼすことのできる」(*ἃ πολλέσαι ἐν γέεννῃ* アポレーサイ エン ゲヘネー)という表現がなされている。先ず、死んだら天国に行けなかったら、「地獄(ゲヘナ)」に落ちる。ただしこういう死後の運命についての考えはマタイにおいては鮮明であるが、新約聖書のすべての著者に同様に見られるわけではない。とすると、地獄で永遠の刑罰にさらされるとしたら、その人は「地獄」でまだ生きていることになる。本当に生命が無くなり、存在なくなってしまうと、刑罰にさらされることもない。そうすると、「地獄」に落ちてでもまだ「生命」は続いているのだから、そこに今度こそ本当に「生命」を奪うことが神による裁きだということになる。マタイはそう考えたと思う。だからこういう文章に

なったのであろう。「殺す」では肉体的な死と思われるから、もっと、根源的に滅ぼされ
 ると言うのである。もっとも、それならば、もしも「地獄」に落ちた後で神によって滅ぼ
 されずに、生き続けるとしたら、どうなるのか。その場合には永遠に「地獄」に居るのだ
 から、そのほうが大変ではないか。といったような具合に理屈が通るような思索を展開す
 ることは、マタイはしなかった。少なくともマタイによる福音書には記されていない。

なお、ルカはマタイのこういう「生命観」を共有してはいない。ルカによる福音書の
 12章の4,5節には次のように書かれている。

「そこで、わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、あとはそれ以
 上に何もできない人間たちを恐れてはいけません。恐れなければならない方を、あなた方
 に教えてあげましょう。殺したあとで、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れ
 なさい。」(「 $\lambda \acute{\epsilon} \gamma \omega \delta \grave{\epsilon} \upsilon \mu \acute{\iota} \nu \tau \omicron \tau \acute{\iota} \zeta \phi \acute{\iota} \lambda \omicron \iota \zeta \mu \omicron \upsilon$, $M \eta$
 $\phi \omicron \beta \eta \theta \eta \tau \epsilon \grave{\alpha} \pi \acute{\omicron} \tau \acute{\omega} \nu \grave{\alpha} \pi \omicron \kappa \tau \epsilon \nu \acute{\omicron} \nu \tau \omega \nu \tau \acute{\omicron} \sigma \acute{\omega} \mu \alpha$,
 $\kappa \alpha \acute{\iota} \mu \epsilon \tau \grave{\alpha} \tau \alpha \upsilon \tau \alpha \mu \eta \acute{\epsilon} \chi \acute{\omicron} \nu \tau \omega \nu \pi \epsilon \rho \iota \sigma \sigma \acute{\omicron} \tau \epsilon \rho \acute{\omicron} \nu$
 $\tau \iota \pi \omicron \iota \eta \sigma \alpha \iota$, $\upsilon \pi \omicron \delta \epsilon \acute{\iota} \zeta \omega \delta \grave{\epsilon} \upsilon \mu \acute{\iota} \nu \tau \acute{\iota} \nu \alpha$
 $\phi \omicron \beta \eta \theta \eta \tau \epsilon \cdot \phi \omicron \beta \eta \theta \eta \tau \epsilon \tau \acute{\omicron} \nu \mu \epsilon \tau \grave{\alpha} \tau \acute{\omicron} \grave{\alpha}$
 $\pi \omicron \kappa \tau \epsilon \acute{\iota} \nu \alpha \iota \acute{\epsilon} \xi \omicron \upsilon \sigma \acute{\iota} \alpha \nu \acute{\epsilon} \chi \omicron \nu \tau \alpha \acute{\epsilon} \mu \beta \alpha \lambda \epsilon \acute{\iota} \nu \epsilon \acute{\iota} \varsigma$
 $\tau \eta \nu \gamma \acute{\epsilon} \epsilon \nu \nu \alpha \nu \cdot \nu \alpha \acute{\iota}$, $\lambda \acute{\epsilon} \gamma \omega \upsilon \mu \acute{\iota} \nu$, $\tau \omicron \upsilon \tau \omicron \nu \phi \omicron \beta \eta$
 $\theta \eta \tau \epsilon$.」) ルカ12-4,5) と言っている。^(注22)

ここでは、マタイのように「からだ」($\sigma \acute{\omega} \mu \alpha$)と「魂」($\psi \upsilon \chi \eta$)をわけて考えて
 はいないし、単に、殺した後でゲヘナへと投げ込む、という言い方をしている。ここで確
 認しておきたいことは、死後にゲヘナというところが存在するということである。このゲ
 ヘナは死者の刑罰の場所を意味する。

もう一つ、先に引用した用語に「ハデス」があった。ギリシア語では「 $\alpha \delta \eta \varsigma$ 」であ
 る。新約聖書では11回引用されていて、すべて「黄泉」と訳されている。「よみ」(陰府、
 黄泉)は下界を指すので、地下における死者の住居と考えられた。ルカによる福音書の
 16章の22節から31節のラザロの物語には、「よみ」は義人の祝福の場所と、悪人のため
 の呪詛の場所とが接して、そこにあることが示されている。他の引用箇所では、死者の行
 く場所との観念がそのまま残っている。この「よみ」は旧約聖書では「陰府」と訳される
 ことが多い。ヘブル語では「Sheol シェオール」と言う。語源的な意味は「消す、砕く」
 という学者もいるが未だ定説は出てはいないようだ。

ところで聖書全体を通して、神の愛に応答した者は天国に行き、そうでない者はゲヘナ
 に行くということが理解出来る。そこでこのことと関係するキリスト教における死と死後
 と、根本的な歴史観との関係に言及したい。何故ならばキリスト教においては最後の裁き
 があると説かれているからである。ヨハネによる福音書の5章29節には「善を行なった者
 は、よみがえっていのちを受け、悪を行なった者は、よみがえって、さばきを受けるので
 す。」とある。

黙示録に次のように記されている。

「また私は、死んだ人々が、大きい者も小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書き記されているところに従って、自分の行いに応じてさばかれた。」(黙示録 20 - 12)

このように、キリスト教においては、すべての人が復活して神の裁きを受けることが定まっているのである。ヘブル人への手紙には「人間には、一度死ぬことと死後に裁きを受けることが定まっている」と書かれている。キリスト教の歴史観では、天地創造と、人間の墮落、キリストの地上への降臨と十字架での磔、復活、福音による救い、人間の死後の天国、地獄行き、最後の審判が定められている。すべての人間は、この歴史観によると、裁きを受けることになっている。そして、その裁きは、死んだ人々に対して今引用したように「自分の行いに応じてさばかれた」と記されているように、生前の各々の行いに応じて裁かれるのである。

Ⅳ. キリスト教の他界観(死後生観)と教育との関係

上で紹介したキリスト教の他界観は、一つの宗教の考え方である。わが国においてはキリスト教の考え方は、一般的ではない。むしろ山岳信仰的な近傍他界観、仏教の遠傍他界観の方がよく知られている。したがって、キリスト教の他界観を教育との関係で論じること自体が一般的には有効ではないように思える。

しかしながら、世界的にはキリスト教の他界観は多くの国の人に受け継がれている。そのことを考えるとき、わが国でもキリスト教の他界観を知ることとあながち意味が無いともいえない、と考える。様々な外国の知見を知ることには意味があることは様々な事柄において既に経験済みであるので、わが国で余り知られていないキリスト教の他界観を知ることにも意味があると思う。

1. 死後の希望としての「場所」

子どもたちに死後のことを教える一つの内容は、死後と希望との関係である。言うまでもなく、希望は生きているときに大切な人間の存在論的な支えである。ドイツの教育哲学者である、O. F. ボルノウが「希望」の哲学を論じているように、希望は人間の存在の根本的な支えになる。死後のことも「希望」との関係で考えられれば、生きている人の支えになると考えられないだろうか。^(注23)

特に死んだ後に「希望」としての「場所」があると考えることによって、死が恐れではなく、慰めともなると思う。言うまでもなく「希望」は実際に天国があるという実証的な内容として考えられる事柄ではない。そうではなく、死んだ後に場所があることを「希望」とするという、存在論的な姿勢なのである。研究者であり、臨床心理士、医師である藤田みさおは「死を貫く希望」というタイトルの論文の中で次のように言っている。「結論から言うと、来世を信じることは、人が抱く死の不安のある側面をやわらげることができる。しかし、それで死の不安の凡てがなくなるわけでは決してない。」^(注24)

そして、藤田は様々な他界観と死との関係についての多くの研究結果を比較した上で次のように言っている。

「来世が存在すると信じる死生観は、わたしたちが死と向かい合わなければならなくなつたとき、わたしたちを導いてくれるガイドや地図のような役割を果たしてくれるのではないか。」^(注25)

そして、「来世が存在すると信じる死生観は、少なくとも『自己の存在が消滅することへの不安』や『死がまったくの未知であるということに感じる不安』をやわらげるものと思われ、これまでの研究によっても理論的に支持されている。」と明言している。^(注26)

もちろん厳密に考えれば、「希望」と「信じること」は同一ではない。しかし、死後の世界を「希望すること」と「信じること」は、その精神的、心的なありようにおいては同じではないとしても、現に生きていいる人を支えるという次元においては、違いはない。

2. 他界（死後）と生き方との関係

今筆者は、他界の「希望」について述べた。そこで一般的には、認められないと思われるもう一つのことを言っておきたい。それは、他界での「裁き」のことである。もちろん「裁き」が他界で実際あるか否かは証明できることではない。しかし、証明できないということで、他界での「裁き」が無いと決めつける考え方は正しいとはいえない。無いかもしれないし、あるかも知れないのである。本来は「裁き」がどのようにして有るか、無いかを吟味しなければならないが、今回はそのことには言及しない。

このことを考える重要性について、具体的な事例を通して考えてみたい。

昨年、死刑になりたいから、だれでもよいので殺した、という人に対して、裁判所は死刑判決を下した。この殺人事件を犯した人は、他界は無いし、「裁き」は無いと考えているのであろう。これは筆者の個人的な推測の域を出ていないことではある。だがもし、「裁き」は無いと考えているとしたら、ことは重大である。無分別な判断で殺人を犯したからである。このことについて考えてみたい。

殺人を犯した彼は、自分の孤独感から社会に対しての恨みを果たそうとした。自分の存在を無視され、抹殺されたと思い込んだ彼は、自ら滅びへの道を選択し、殺人を犯した。このように考えられる。その行為に対して社会は「裁き」を当然実施する。これは彼が選んだ道に対する社会の「裁き」である。裁判で彼自身への社会的な「裁き」は終結する。しかし、殺された人の人生は復活しない。死刑という意味は、殺人という行為に対して量刑的に判断されて裁定された結論である。殺された人の人生を無化されたことに対して判決は下された。

だが、そのような量刑的な判決によって、殺された人の人生は復活しない。いくら社会的な判断が殺人を犯した人に対してなされようとも、死んだ人の人生は二度と戻らない。社会的な法理論によって裁かれたとしても、厳粛な事実として、死んだ人の人生は戻らない。ここに法理論の限界がある。この地上での生、人生を無化してしまった、この厳粛な無残な事実は、どう考えても、深く、重い。このことは法理論では解決できない。

キリスト教等の宗教によって、いのちの根源である、絶対者、永遠なる存在者による根本的な裁定が要請される所以である。このことに関しては古今東西様々な思索が為されて

きた。それらの思索は、たとえば、キリスト教の「天国」、「地獄」思想、「神の裁き」の思想、を生み出した。人間の、この深遠な思想を我々は再考しなければならない。

「裁き」に関して言うと、まずは自らの心、良心による「裁き」がある。そして社会的な「裁き」もある。これらは、この地上での「裁き」である。しかし、考え方として、来世での「裁き」があるかも知れないという思想をお互いに考える必要があると思わないではいられない。すべてがこの地上で終結する思想ではなく、この地上で行ったことについて来世で言い開きをしなければならないという思想をも現代においても再考する必要があると思うのである。

かつて、わが国では、というより筆者の田舎では、筆者が小さい頃、悪いことをするとおまわりさんに言うよ、と言われた。また、見えないところで神様が見ているよ、とも言われた。（この場合の神様は、キリスト教の神様ではなく、神社の神様を意味した）幼いながら、なにか人間を超えた存在が、自分のやることを見ている、という感覚を抱いて暮らしていたように思う。

筆者が言いたいことは、自分の言動の善し悪しは、自分勝手に判断してはよくないということである。自分の心、良心、社会の判断、法律、そして、来世での「裁き」等、さまざまな角度で判断がなされるということを知っておきたいのである。

一つの思想としてのキリスト教は、神からの啓示宗教として、そのことを説いてきた。最後の審判があるという考えを、社会の中で人間は生きながら思うことが必要である。そう考えながら人間は、1回の人生を責任を持って選びとって生きていかななくてはならない。そうでないと、この地上で自分の責任でなく死んでいった凡ての人間のいのちは、あまりにも、はかなく、虚しく、悲しい。

キリスト教の復活思想は、ユダヤ民族が苦しい捕囚の苦難の中から呻きとして生み出され、表されたことを理解するとき、現世での生と、死後の裁き、死後の生を考えることは、現代において意味があることだと思う。

このような考えを発達に応じ、年齢に応じて、子どもと話し合い、伝えていく教育が要請されと考える。

もうひとつ考えたいことは、「裁き」には、地上での悪いことに対してだけ為されるのではない、ということである。善い行いに対してもなされるということである。このことも子どもに伝えていく必要がある。

具体的には、善い行いは、その行為自体で自らが、嬉しいと思うこと自体が、報いであるということ。そして、教師の側が、その善い行為に対して、直接、間接にその子に対して報いて上げることである。「善い行いを続けると、よい人生を築きあげることが出来るよ」ということが必要であろう。また、死んだ後にも報いがあることも伝えて上げることも必要であろう。

3. 教育のまとめ

以上のことを総合的に言おう。先ず一人ひとりの生き方によって人生がよくも悪くもなる、ということ。そして各自の生きる内容に対して社会の側から多様な判定、「裁き」があること。死んだ後にも地上での行いに対する「裁き」があることをともに考えながら教

えていくことが要請されることであろう。

これまでに述べた内容に対しては賛否両論が予想される。否、むしろ多くの反論がなされると思う。だが、人間の歴史を考えると、人間中心主義、実証主義、科学至上主義が進行したその落とし穴が現在表れているように思えて仕方がない。人間の理性には限界があり、理性の上に超越者が存在するという、そして、死後の世界があり、そこで地上での評価としての「裁き」があるという思想に思いを巡らすときに来ているように強く思う。筆者のこの考え方に近い内容を矢野智司は「戦後教育は、教育の場から『神話』や『聖性』や『超越』といった言葉を追放し、科学的合理主義をもとにした世俗教育に限定してきた。」と言って戦後教育を批判している。^(注27)

V. おわりにー今後の課題に向けてー

これまでもにもにキリスト教の他界観と教育、生き方との関係について述べた。今後は、今回の研究内容を、よく知られているキューブラ・ロスの、医師としての実証的な研究事例や、トランスパーソナル心理学等との関係についても照らし合わせることを課題である。その際にアメリカのケン・ウィルバーの膨大な研究との関連をも射程に入れて探求したい。

一般的にはあまり問題視されない研究内容であるが、目に見える事柄に目を奪われている教育界の現象に対して、宗教的、ないし宗教思想的な視点で教育を問うことも必要であると考え。このような作業無しに子どもの心、人格形成を問題視する傾向を憂慮する者である。矢野が言うように、教育が近代の労働をモデルにして作られ、そのモデルに引きずられて子どもの発達を目指すことに終始している現在、筆者の主張には意味があると思う。^(注28)

(注)

1. 文部科学省 2008 年「日本人の国民性調査」の第 3 章「宗教」の結果。全体では、「あの世を信じる」が 1958 年では 20 % が、2008 年では 38 % と高くなっている。「あの世を信じない」は 59 % から 23 % と低くなっている。この推移についても分析する必要がある。
2. 古東哲明 『他界からのまなざし 臨生の思想』 講談社・選書・メチエ 2005 古東はこの本で、他界からこの世を見直し、この地球世界の在り方を感じ、考え、生きなおすことを論じている。それを「臨生」と名付けている。臨死ではなく、臨生である。死の間際に至る臨死ではなく、生の間際に臨むという意味での臨時生である。
3. 古東 同上書 P. 13
4. 古東 同上書 P. 13
5. 古東 同上書 P P. 14—15
6. 古東 同上書 P. 16
7. 古東 同上書 P. 17
8. 古東 同上書 P P. 20—21

9. 熊野純彦 『死生学2 死と他界が照らす生』 東京大学出版会 2000 P. 18
10. 熊野 同上書 P. 19
11. 熊野 同上書 P. 19
12. 佐藤弘夫 『死者のゆくえ』 岩田書院 2008 この著書の中の終章で佐藤は「異界からの眼差し」に1節を割いて日本人の死者に対する考え方をまとめている。
13. 手元にある日本人の著書を紹介しておく。1. 岡山秀雄 『天国と極楽 キリスト教と仏教の死生観』 いのちのことば社 2007 2. 土屋澄男 『永遠のいのちの中へ 聖書の死生観を読む』 YOBEL, Ink. 2009 3. ルーテル学院大学神学セミナー編 『死と信仰』 キリスト教視聴覚センター AVACO 1997 4. アルフォンス・デーケン メヂカルフレンド社編 『死を考える』 第1, 2, 3巻 メヂカルフレンド社 1986 5. 村上伸編 『死と生を考える』 ヨルダン社 1988 6. 大林浩 『死と永遠の命 そのキリスト教的理解と歴史的背景』 ヨルダン社 1994
14. コリーン・マクダネル, バーンハード・ラング 大熊昭信訳『天国の歴史』大修館 1993 P. 606
15. J. B. ラッセル 野村美紀子訳 『天国の歴史 歌う沈黙』 教文館 1998 P. 18
16. 同上書 P. 31
17. アリスター・Eマクグラス 本田峰子訳 『キリスト教の天国 聖書・文学・芸術で読む歴史』 教文館 1998 P. 224
18. 本論文で使用するギリシア語は次の聖書から引用する。Jay P. Green, Sr. 『The Interlinear Bible Hebrew - Greek - English With Strong's Concordance Numbers Above Each Word』 HENDRICKSON 1986
19. 聖書の引用はわかりやすいので本文中に引用した箇所を記す。
20. 後で論じる文章なのでギリシア語で引用しておく。
21. 田川健三 訳著 『新約聖書 訳と注1 マルコ福音書・マタイ福音書』 作品社 2008 田川はこの訳著の中で、キリスト教の用語について綿密に分析し、論じている。ゲヘナもその一つである。筆者は田川の研究に学びつつ、彼の考えを紹介した。
22. この箇所を分析するのでギリシア語で引用した。
23. ボルノウ 須田秀幸訳 『実存主義克服の問題 新しい被護性』 未来社 1969
ボルノウはこの著書で「期待」と「希望」の違いについて論じ、希望について次のように言っている。「わたしが希望しながら未来に対処する仕方において、わたしは、未来の贈り物の根本的に全く予見できぬものにたいして、開かれているのである。…それゆえ、希望は、見極めえないもろもろの可能性の空間の中に、人間を引き入れる。ただこれだけが、真の、言い換えれば、見極めのつかない、開いた未来なのである…未来は、人間を慈悲深く迎えて人間を空虚のなかに転落させない、支持的な根底のように思われるのである。」 P. 130
24. 藤田みさおは『生と死のケアを考える』 カール・ベッカー編著 宝蔵観 2000 の中の、第7章で「来世を信じることは死の不安をやわらげるかーがん医療の現場からー」を論じている。この引用箇所はその中のP. 154に書かれている。

- 25. 同上書 P. 171
- 26. 同上書 P. 172
- 27. 矢野智司 『贈与と交換の教育学 漱石、賢治と純粹贈与のレッスン』 東京大学出版会 2008 P. 30
- 28. 同上書 矢野は次のように言う。「今日、学校教育の論理は、子どもの有用な能力を発達させることを目的とする、この『発達としての教育』である。ところで、この『発達としての教育』の論理は、近代の労働をモデルにして作られている。」 P. 123